❑第２回全体研究会

日時：2013 年 1 月 23 日（水）　12：30－14：30
場所：慶應義塾大学三田キャンパス　東館 4 階セミナー室
報告者：David Shambaugh（The George Washington University）
タイトル：“China Goes Global: The Partial Power”
使用言語：英語

概要：

第 2 回全体研究会では、米国を代表する中国研究者であるデイヴィッド・シャンボー氏を招き、シャンボー氏の最新著書（2013 年 2 月刊行予定）にまとめられた研究成果をもとに、大国化する中国に対する評価の在り方を議論した。結論から述べればシャンボー氏の主張は、中国のプレゼンスは「Global Power（世界的な大国）」ではなく「Partial Power（特定の領域に一定の影響力をもつ大国）」と評価されるべきであり、中長期的にも日本や EU と同様にミドル・パワーに止まるというものである。

シャンボー氏はまず、中国の貿易統計、海外直接投資（ODI）、世界各国での世論調査等の指標を分析し、中国の国際的影響力は非常に限定的であると結論づけた。また中国国内におけるインタビュー調査に基づいて国際社会のパブリック・グッズへの認識の低さを指摘し、産業における技術・概念の先進性の欠如、多国籍企業の不在などの分析から、そのソフト・パワーも脆弱であるという見解を示した。そのうえでシャンボー氏は、中国はグローバル・アクターだが、グローバル・パワーではない、中国の影響力は部分的で貢献的ではないという評価を示し、富（Wealth）とパワー（Power）と影響力（Influence）をイコールとみなしてはならないと主張した。

質疑応答においては、極めて活発な意見交換がなされた。フロアからは、中国の内政要因として、中間層の増加、メディアへの対応（南方週末の事例）、政策における合意形成メカニズム、党中央・政府の見解などについて質問がなされた。また中国の現状に対しても、これを地域大国と見なせるか、グローバル化への移行期と見なせるかといいった解釈上の質問がなされた。シャンボー氏は回答において、中国外交が非常に「取り引き的（transactional）」であることを強調し、自己利益の追求のみが先行する外交政策を強く批判しながらも、外交の多元化が進み、国内でコントロール不能に陥っている状況についても客観的に解説した。「新興勢力にすり寄って（appease）はならない」とするシャンボー氏の議論は、領土問題が懸案の日本では共感を得るものであると同時に、同氏が「唯一の大国」とする米国外交の自信をうかがわせるものであった。